

分散会8

司会者 兵頭 智
記録者 清水 大輔
会場責任者 中尾 治司

福岡県久留米市

パパラフ

「パパラフ」とは、パパのゆるいつながりで、ラフに面白く楽しみつくすという意味。未就学児をもつ父親たちの居場所のようなものである。毎月第4土曜日（11：00～12：30）を座談会の日として子どもを連れて座談会を開催している。子育てについて話したり、父親の特技趣味を生かした活動の話をしたりしている。リピート率は75%と高い。座談会のほかに、田植え・稲刈り、父子キャンプ、魚釣りなどの父親の好きなことや趣味からワークショップとして行っている。子どもたちにとっても異年齢の交流となり、父親にとっても活躍の場となっている。



馬場 義之 氏

徳島県西富田公民館

徳島市新町小学校放課後子ども教室

新町小学校と西富田公民館が連携して、放課後子ども教室を開いている。平成19年に開設し、徳島で初の取組みであった。現在は4つの放課後子ども教室がある。学校の空き教室を拠点に1年生から3年生が参加している。宿題を済ませてから、学校の教室や家では味わえないようなものづくり、教室や運動場での自由遊びを行っている。放課後教室の運営には、地域の各種団体が参加しており、地域のみんなで放課後クラブを支え、地域の子どもは地域で育てようという意識で取り組んでいる。



若佐 重明 氏

愛媛県無人島実行委員会

御五神島・無人島体験事業

子どもたちが無人島と言う制約された環境の中で自ら創意工夫し、協力し合いながら自然体験活動・生活体験活動に取り組むことにより、自立心や協調性などの社会性を育むとともに、困難なことに直面しても克服できる柔軟で強い精神力を養うことをねらいとしている。

10日間の中7日間無人島での生活をする。朝の集いに参加すること、起床、就寝の時間、3食必ず食べる事以外は班で生活考え、基本的に時間も班で自由に使うようにしている。無人島生活の中で1日は自給自足の日として設定している。

学校では過密なスケジュールに時間を追われることが多い。しかし、島での生活では時間についての制約がないので、子どもたち自身に考えさせるようにしたり、子どもたちが主体的に活動できるようにしたりと、リーダー・サブリーダーは、できる限り口出しを控えてサポートに徹して、子どもたちの笑顔や力を引き出せるようにと努めた。



御五神島キャンプサブリーダー

質疑応答

パパラフ

Q1 座談会での話の内容は？

→家庭でのストレス、子づくり、共働きの財布事情、多種多様な話をしている。お母さんが悩んで子育てしているように、お父さんも悩んでいる。なかなか職場で話せなかったり、友達などに相談することができなかったりする人が多い。座談会では、そのような悩みを打ち明けることができる。車で1時間ほどかけて県外からの参加がある。

Q2 素敵なパンフレットであるが、その技術と予算はどのようになっているのか？

→久留米市の子育て助成金で作成した。パパの中にデザイナーがいて、それぞれのパパの得意なことを座談会で話しているので、その力を生かしている。

Q3 人集めの苦労は？

→最初は自分の友達を集めて行った。しかし、行き詰まって6回目に2人(自分と立ち上げた人)の参加となってしまった。その後、チラシでの呼びかけをやめて、座談会の場所と時間を固定化させることとした。

Q4 活動資金はどのようにしているのか？

→まず、はじめの3年間は10万円の助成金を利用した。4年目からは助成金なし。様々な講演に呼ばれることがあるので、謝礼などを活動費に充てている。また、ワークショップの参加者から参加費をいただいている。

Q5 お母さん側の影響は？

→パパが子どもを連れて座談会に参加するようにしているので、お母さんは自由な時間とすることができる。お母さんは24時間ほぼ子どもにかかわっているので貴重な時間を捻出することができる。



徳島市新町小学校放課後子ども教室

Q1 地域の人材も高齢化になっていると思うが、若い人にはどのように呼びかけているのか？

→剣山への登山、餅つき大会などは若手が必要になってくるので、特に若い人の多い西富田消防分団の方に協力していただいている。また、クリスマスケーキ作りなどには保護者への協力も依頼している。

Q2 他の県の学童クラブなどでは、他のスポーツ少年団活動等の団体や学校の課外活動でグラウンドを使用できないことが課題であると聞いたことがあるが、それについては徳島ではどうか？また、学校との連携の仕方はどうなっているか？

→時間の設定をしてグラウンド使用している。子どもたちを見分けるためにビブスを着るようにしている。学校長と連携をとっているので学校側は協力的である。経理についても教室ごとに違ってきているが新町小学校の子どもクラブでは教頭が協力してくれている。応急処置についても養護教諭が行うなど、学校との連携を密に行うことができている。

Q3 教育的プログラム開発(詩を暗唱させたり、体力づくり)等は導入しようとしているか？また、かかわる人たちの人件費は？

→導入しようとはしていない。学年によって入ってくる時間が違い、宿題を終えてから活動することとしているので、一斉に始めることができない。委託料の中から、指導時間に応じて、決められた謝金を支払っている。児童からは保険代のみ徴収している。

Q4 同じ学校の子どもなのに所属で責任や関わりを区別することがある。どうしたらいいのでしょうか？

→地域だから、地域の子どもたちだからという意識で子どもたちにかかわろうとしている。

御五神島・無人島体験事業

Q1 リーダーやサブリーダーの役割について？

→リーダーは小・中学校の教師、サブリーダーは大学生で班ごとにリーダー、サブリーダーが共通理解をして子どもたちの生活を支えている。安全管理としては、班の子どもたちには、リーダー、サブリーダーが付くようにしており、全体としては本部スタッフが見るようにしている。キャンプの準備として事前に1泊2日で現地の把握、実技講習などを行っている。

Q2 この事業の大元は何であったのか？

→元は愛媛県の事業であった。予算の打ち切りになってしまい「NPO 子どもチャレンジ支援機構」を中心に実行委員会として運営するようになった。今年通算28回目となっている。

県からの流れがあってリーダーを小・中学校の教師を出張扱いとしている。サブリーダーの大学生は地域連携実習として単位にもなる。30時間で1単位としている。この事業以外にも実習はあり、学生が自分のスケジュールに合わせてネット上で登録できるようになっている。

Q3 参加者や参加費については？子どもたちの参加の動機は自分から？

→愛媛県下から小学校5年生から中学校3年生までの児童・生徒が参加している。定員42名に対して、100名以上の応募があり、抽選としている。子どもたちの参加料は25,000円。応募の際、動機を記入することとしている。ほとんどが自分で応募しているようであるが一部保護者が希望していかせることもあるようである。

Q4 なぜ、サブリーダーとして参加しようとしたのか？

→昨年度、この会(地域実践交流集会)に参加して興味をもった。先生から勧められた。元々アウトドアに興味をもってずっと参加したかった。教員志望なのでいろいろなことにチャレンジしたかった。参加してみて、不便な生活の中、子どもたちだけでなくサブリーダーも成長することができた。

Q5 安全対策はどのようにしているのか？

→平成19年イノシシが島にいることが分かった。次の日、撤収をすることとなった。現在は、子どもたちの活動範囲を制限して、その外には電気ネットを張って対策をしている。また、不寝番も担当も決めて見守りを行っている。台風の対策としては、港の公民館を避難場所として確保しており、船が出なくなる前に非難するようにしている。ここ6年は無人島ですべての日程通り生活することができている。

Q6 参加者の成長は？

→事業後たくましく成長している。不便な生活を経験することで、改めて自分の今までの生活のありがたさを感じる子どもが多い。学校生活においても前向きになってきていると言った児童もいる。28年前から事業が続いているので、2世代で参加している児童もいたり、リーダーの中にも児童の時参加していたりしている教員もいる。

最後に

子育て系のサークルは母親中心のものが多く、「パパラフ」のようなサークルが将来的に「おやじの会」のように全国に広がっているとよい。また、横のつながりをしっかりとっていくことが大切である。

体験活動においては、経験の格差がある。より多くの子どもたちに様々な経験をさせたいものである。